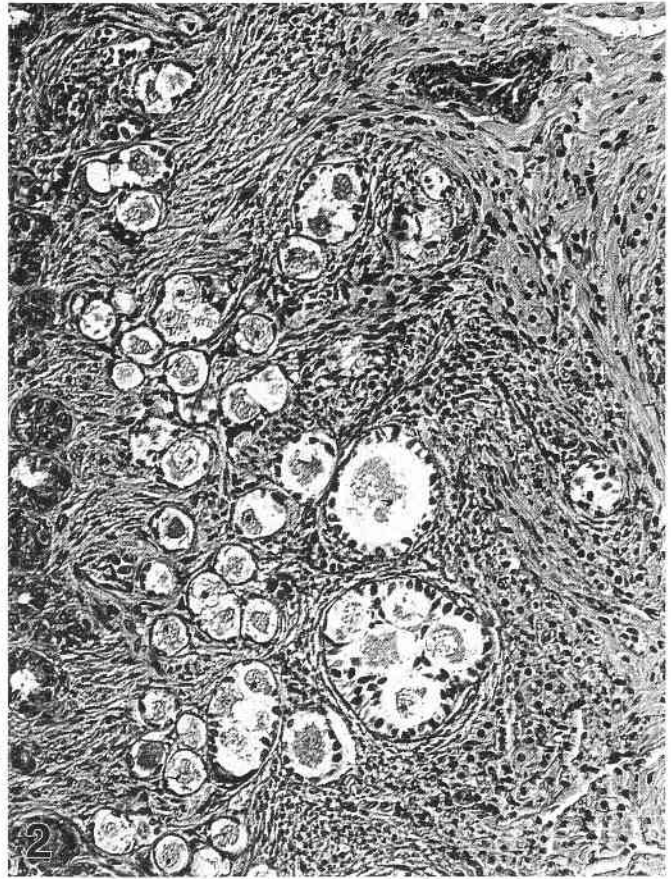


イヌの卵巢

(財) 残留農薬研究所出題 第 39 回獣医病理学研修会標本 No. 745



動物：犬，ビーグル種，雌，8ヵ月齢。

臨床事項：ある毒性試験に用いた無処置対照群の動物で，臨床的には異常はなかった。

剖検所見：卵巢を含むいずれの臓器・組織にも肉眼的異常はなかった。

組織所見：複数の卵を含む卵胞が多数観察された(写真1, H-E)。特に卵胞洞を形成した二次卵胞において複数の卵が目立ったが，1~2層の顆粒膜細胞に囲まれた比較的初期の一次卵胞の中にも複数の卵を有しているものがあり，さらに，この2つの中間段階の卵胞も存在した。同一卵胞内にある複数の卵は必ずしも同一の発育状態にあるとは限らなかった。また，複数の卵を含む二次卵胞は時に不規則な形状を示した。ラミネン免疫染色では，原始卵胞の段階から複数の卵が同じ膜によって囲まれていることが示された(写真2, ラミネン免疫染色)。

診断および考察：このような卵胞は成書で多卵性卵胞，polyovular folliclesと言われているものに相当すると考えられる。その成因としては，通常ひとつずつ卵胞細胞に囲まれるはずの原始卵胞が複数まと

めて囲まれてしまうことが可能性として挙げられている。イヌ以外にも多くの種類の動物で報告されているが，一般に若齢動物が多い。我々の研究所で実施した14本の亜急性試験に用いた対照群のビーグル犬(8~10ヵ月齢)の検査結果では，全頭数58頭中23頭(40%)，全卵巢116個中34個(29%)に，また，16本の慢性毒性試験に用いた対照群の動物(17~20ヵ月齢)では，全頭数71頭中15頭(21%)，全卵巢142個中22個(15%)に多卵性卵胞が認められた。これらは二卵性卵胞が1個しかなかったものではなくして集計した値であり，単発性の二卵性卵胞を含めるとその値はさらに高くなる。なおブリーダーによる発生頻度の差はなかった。イヌではこのように発生頻度が高いことから，これは正常像とも考えられる。一方，マウスではもともと多卵性卵胞の発生頻度が低い，外因性ホルモンの投与によってその発生が増加するという報告もあり，多卵性卵胞の診断に当たっては，種差や処置の有無を考慮に入れることが必要と思われた。